

外国人に方言を使用することに対する意識

— 東海地方における調査 —

Perceptions of Japanese and international students regarding the use of a Japanese dialect:
Research in the Tokai region

高村 めぐみ

TAKAMURA Megumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi university

E-mail: takamura@aichi-u.ac.jp

Abstract

This study was conducted to clarify the perceptions of Japanese and international university students residing in the Tokai region regarding the use and teaching of a Japanese dialect to foreigners. A questionnaire survey was conducted on 58 Japanese students and 34 international students. The results showed that approximately 60% of both the Japanese students and international students felt that “it is unnecessary to teach the dialect” because (1) the Tokai regional dialect is almost identical to common Japanese, (2) even Japanese people do not use the dialect, and (3) common Japanese should be learned before the dialect. In contrast, approximately 40% of both the Japanese students and international students felt that “it is necessary to teach the dialect” because (1) it is needed for daily life in the Tokai region and (2) dialects must be preserved as a part of the region’s cultural heritage. Furthermore, while many respondents felt that it is sufficient to naturally learn the dialect, there were some international students who were unsure if they had even been spoken to in the dialect. There may be a correlation between the availability of opportunities for international students to be exposed to a regional dialect and their level of acceptance as “insiders” within that region. Further studies are needed to explore this relationship with the degree of social acceptance.

Key words : Dialects, Common Japanese, Tokai-region

1. はじめに

外国人に対する方言¹⁾教育についての議論は、1990年代以降、地方在住の日本語学習者が増加したころから活発になった。それまで、「日本語教育とは全国共通語²⁾教育である」という暗黙の認識が一般的（国語研1993）だったが、地方在住の日本語学習者が増加し、教室で習うことばと生活語との乖離に気づきだしたのである。これ以降、外国人は自分の生活の場で使われる方言を学びたがっている（国語研1993）という報告や、留学生は日本人学生を通じて方言とよく接触している（合津2003）という報告がされるようになった。その一方で、東海地方の日本人を対象に行った「外国人の方言使用」に関する意識調査で、外国人が東京弁を使用することに対しては受容度が高いが、名古屋弁、東北弁を使うことには拒絶感が強い（森1995）と述べた調査もある。

歴史的にみると、1970年代まで、日本で方言は否定的なものとして扱われてきた傾向がある。また、方言は親密な人と私的場面で話すことばで、共通語は改まった場面で話すことばである、というように、相手との親疎や場の改まりの度合いが使い分けに影響を与えている（木部2013）という。さらに、最近の全体的な傾向として、日本全国共通語化が進み、東京や京都からの距離に関係なく、どこでも標準語形使用率が80%を超え（木部他2013:76）、特に若年層での共通語化が進んでいる（近藤2010）。では、方言は衰退の一途をたどり、外国人も方言に接触する機会はなくなっているかということ、実情はそうではない。方言は形を変え、存続している。

1990年代、2000年代と近年に近づくにつれ、方言には「楽しい」「かわいい」「癒やし」といった価値が加えられ、いわば「方言コンプレックス」の時代から「方言prestige」の時代へと変化してきている（木部2013:102）。最近では、比較的若い年齢層を中心に、親密な間柄や砕けた場面で自分の気分を伝えるストラテジーの一つとして、方言を自在に使い分ける「方言コスプレ」行動をしている（田中2011）という報告も見られる。

以上の報告から、日本人は、相手が外国人であっても、「親密な間柄」の人との「砕けた場面」であれば、方言を話しているのではないかと推測できる。

では、日本人、外国人双方の方言に対する意識は30年前とは変化しているのだろうか。本研究では、日本人は外国人に方言を使うのか、外国人は方言に接する機会があるのか、両者は方言教育が必要だと思っているのか、の3点を明らかにすることを目的に、以下の2つの調査を行った。

※本研究は「日本語教師の母方言を生かした『機能表現指導の指標』」（令和2年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号20K00737 研究代表者：高村めぐみ）による助成を受けている。

1) 本稿では、特にことわりがない限り「地域方言」のことを指す。

2) 言語を異にする人たちの間で、互いの意思疎通のために共通に用いられる言語（田中1988）を指す。

まず、調査1では、東海地方在住の大学生（日本人学生／留学生）の「外国人への方言使用の実態」、および「外国人への方言教育に関する意識」の概要をつかむために、アンケート調査をした。次に、調査2では、東海地方在住の大学生（日本人学生／留学生）の「外国人への方言使用の実態」、および「外国人への方言教育に関する意識」をより明らかにするために、アンケート調査よりも意識の深堀が可能な半構造化インタビューをした。

2. 調査1（アンケート調査）

2.1. 日本人学生への調査

2.1.1. 調査概要

まず、2.1では日本人学生への調査について述べる。2021年6月から2022年7月にかけて、東海地方在住の文系学部に所属する日本人学生58人にアンケート調査をした。今回アンケート調査に協力した学生は、筆者が担当する日本語、日本語教育関連の科目を履修していた学生である。アンケートはGoogle Formで行った。質問項目は以下の4つである。Q1、4は自由記述、Q2は三項選択法、Q3は二項選択法で回答を依頼した。

Q1. 出身県

Q2. 外国人と話すときに方言を使うことがあるか（以下「方言使用」）

a. 方言で話す／b. 共通語で話す／c. そもそも外国人と話さない

Q3. 外国人に対して愛知、岐阜、三重などの東海地方の方言を公的機関で教育する必要があると思うか（以下「方言教育の必要性」）

a. 必要ある／b. 必要ない

Q4. それはなぜか

2.1.2. 結果と考察（選択肢）

結果をグラフで示す。まず、「Q1. 出身県」は愛知43人（74%）、岐阜7人（12%）、三重7人（12%）、静岡1人（2%）で、4分の3を愛知県出身者が占めている（図1）。

「Q2. 方言使用」に対する回答は、「b. 共通語で話す」が37人で最も多く（64%）、次いで「c. そもそも外国人と話さない」（11人、19%）、最も少ないのは「a. 方言で話す」（10人、17%）であった（図2）。この結果から、東海地方に住む大学生が外国人に方言を使って話しかけることは非常に少ないことがわかる。

「Q3. 方言教育の必要性」については、「a. 必要ある」と答えた人が22人（38%）、「b. 必要ない」と答えた人が36人（62%）であった（図3）。前述したように、外国人と話すとき、自分や周囲の人は共通語を使うことが多いと認識しているため、それが方言教育は不要であるという回答につながったものと推測できる。

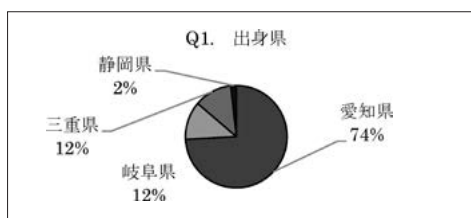


図1. 調査協力者の出身県

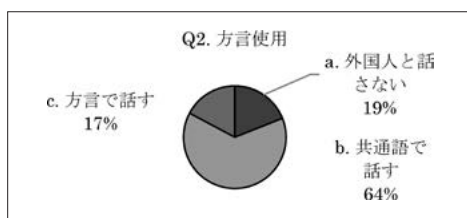


図2. 方言使用の実態

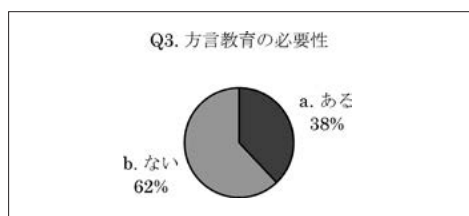


図3. 外国人への方言教育の必要性

次に、方言教育が必要か、東海地方の中でも地域による差がある可能性を考え、「Q3. 方言教育の必要性」と「Q1. 出身県」とのクロス集計をした。だが、岐阜、三重、静岡については母数が少ないため、多くを語れない（岐阜：a. 必要ある＝4人、b. 必要ない＝3人、三重：必要ある＝3人、b. 必要ない＝4人、静岡：a. 必要ある＝0人、b. 必要ない＝1人）。愛知では、「a. 必要ある」が15人、「b. 必要ない」が28人で、方言教育が必要ではないと考えている人のほうが多い。自分が普段、共通語に近いことばを話しているを意識しているか、方言を日常的に多用するかという点が影響していると考えられる。詳しい現状や理由については、調査2のインタビューで深堀する。

さらに、「Q3. 方言教育の必要性」と「Q2. 方言使用」とのクロス集計をした。「c. 外国人に方言で話す」（10人）は、a. 必要ある（5人）とb. 必要ない（5人）が半数であったが、「b. 共通語で話す」（a. 必要ある＝14人、b. 必要ない＝23人）、「a. そもそも外国人と話さない」（a. 必要ある＝3人、b. 必要ない＝8人）と答えた人は、方言教育は必要ないという回答が多かった。つまり、外国人に対して共通語を使う人ほど、外国人への方言教育は不要だと考えていることがわかる。それは、日常生活において、自分が外国人に方言で話すこともなければ、外国人が方言を話す場を目にすることもないため、このような結果になったのだろう。

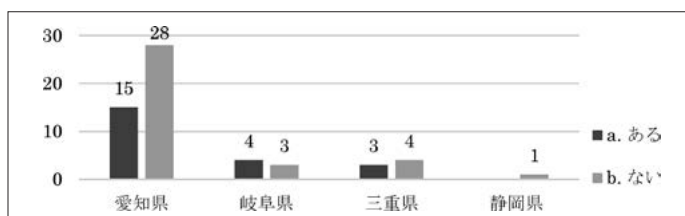


図4. Q3. 方言教育の必要性×Q1. 出身県

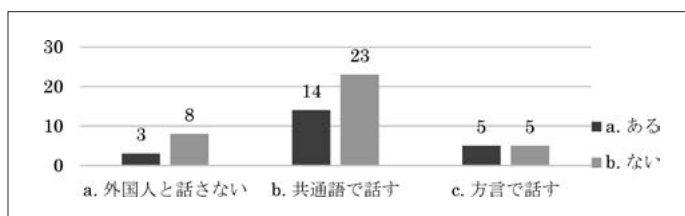


図5. Q3. 方言教育の必要性×Q2. 方言使用の実態

2.1.3. 結果と考察（自由記述部分）

最後に、Q4. 「方言教育が必要／不要と考える理由」の自由記述部分を分析した。分析にあたり、KJ法におけるグループ分けの手法を用いて分類した。

まず、方言教育が必要ない（計36人）と答えた人の中で、最も多い理由は「A1. 共通語だけで十分だから」（24人、67％）であった。具体的には、「東海地方の方言は共通語とほとんど同じなので、方言を勉強しなくても理解できないほどではない」、「日本人でさえ方言を使っていない」、「まずは共通語をしっかりと学ぶべきである」という3つが大きな理由としてあげられた。他にも「方言は綺麗で正式な日本語ではない」という意見や、「一生狭い東海地方に居続けるとは限らないから」、「日本人が気を付けて共通語を話せば解決する問題だから」という意見もあった。2番目に多かったのは「A2. 自然習得で十分、教育までは不要」（7人、19％）で、方言は「生活していく中で自然に身につく」と考えている。3番目は「A3. 外国人の負担が大きいため不要」（5人、14％）である。「ただでさえ日本語は難しいのだから、共通語に加えて方言まで勉強するのは負担が大きい」という意見と、「外国人が方言を理解するのは難しい」という意見があった。以上のことから、東海地方の方言は共通語と大きな差がないし自然に身につくものだから教育機関で方言を学ぶ必要はないと考えていることがわかる。

次に、方言教育が必要である（計22人）と答えた人の中で最も多い理由は、「A4. 東海地方で生活するのに必要」（12人、54％）であった。回答者は、「東海地方で生活する上で理解できない方言があると不便だから」と述べている。これは、上に書いた「方言教育が必要ない」理由としてあがった「東海地方の方言は共通語とほとんど同じなので、方言を勉強しなくても理解できないほどではない」とは逆の事を示している。2番目に多かった

のは「A5. 日本人に方言がつい出てしまうから必要」(5人、23%)であった。こちらの回答の中には「方言を出さないようにしていても不意に出てしまい、それを会話の中でいちいち説明するのは面倒」という意見や、「外国人が方言を理解できなかつたら不安にさせてしまう」という意見が出た。3番目は「A6. その土地の文化を知るのに方言が必要」(3人、14%)で、「方言はその地域特有の文化を伝えるために必要なものである」と述べている。最後に、「A7. 自然習得より機関で学んだほうが効率的だから教育は必要」(2人、9%)という回答があった。以上のことから、方言は共通語と異なるため、理解できたら生活に便利だし、文化を伝える際にも有効な手段である。そのため、教育機関で方言教育をする必要があると考えていることがわかる。

表1 アンケート結果(日本人学生)

Q3. 必要性	Q4. 回答 (Q3. 「ある／ない」の理由)	回答数	割合
ない	A1. 共通語だけで十分だから不要	24人	67%
	A2. 自然習得で十分、教育は不要	7人	19%
	A3. 外国人の負担が大きいため不要	5人	14%
計36人			計100%
ある	A4. 東海地方で生活するのに必要	12人	54%
	A5. 日本人に方言が出てしまうから必要	5人	23%
	A6. その土地の文化を知るのに必要	3人	14%
	A7. 自然習得より効率的だから必要	2人	9%
計22人			計100%

以上、日本人学生への調査の結果、東海地方に住む大学生は、外国人と話す際は共通語で話し、外国人に対する方言教育は不要だと考えている人が多いことがわかった。それは、東海地方の方言は、外国人が学ぶ共通語と大きな相違がないため、外国人の負担を強いてまで方言を学ぶ必要はない、というのが理由である。木部(2013)が言うように日本全国共通語化が進んでいることを示す結果であると言えるが、森(1995)が言うような「外国人が名古屋弁を使うことへの拒絶感」は見られなかった。

2.2. 留学生への調査

2.2.1. 調査概要

2.2では留学生への調査について述べる。2022年7月から2022年10月にかけて、東海地方在住の大学に所属する留学生34人にアンケート調査をした。アンケート調査に協力したのは、筆者が担当する日本語、日本語教育関連の科目を履修している学生である。アンケートはGoogle Formで行った。質問項目は以下の4つである。Q1、4は自由記述、Q2は三項選択法、Q3は二項選択法で回答した。

Q1. 出身地域

- Q2. 日本人に方言で話しかけられることがあるか（以下「方言接触の経験」）
 a. ある／b. ない／c. 方言かどうか分からない
- Q3. 愛知、岐阜、三重などの東海地方の方言を公的機関で勉強する必要があると思うか（以下「方言教育の必要性」）
 a. ある／b. ない
- Q4. それはなぜか

2.2.2. 結果と考察（選択肢）

結果をグラフで示す。まず、「Q1. 出身」は韓国15人（44%）、中国17人（50%）、台湾2人（6%）で、韓国と中国が大多数を占めている（図6）。

「Q2. 方言接触の経験」に対する回答は、「a. ある」が13人で最も多く（38%）、次いで「b. ない」（11人、32%）、「c. 方言かどうか分からない」（10人、30%）であった（図7）。2.1.2では日本人学生の64%が「b. 共通語で話す」と回答していたため、ここでの結果「（Q2. 方言接触の経験が）b. ない」（11人、32%）と矛盾があるように見えるが、「c. 方言かどうか分からない」（10人、30%）を加算すると、数字がほぼ一致する（計62%）。留学生が「c. 方言かどうか分からない」のは、単に共通語が理解できないだけかもしれないが、共通語でも方言でもないことは、例えば若者ことば等を理解していない可能性もあるだろう。

「Q3. 方言教育の必要性」については、「a. 必要ある」と答えた人が13人（38%）、「b. 必要ない」と答えた人が21人（62%）であった（図8）。この結果は日本人学生と全く同じであった（図3）。自分が方言で話しかけられていると認識はしていても、それが方言教育の必要性に結びつくとは考えていない留学生がいることがわかる。

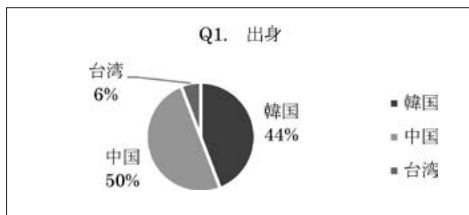


図6. 調査協力者の出身地域

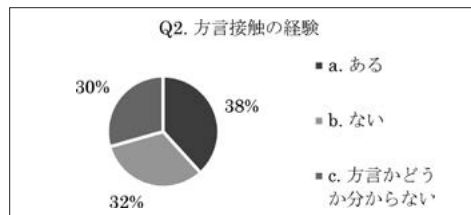


図7. 方言接触の経験の実態

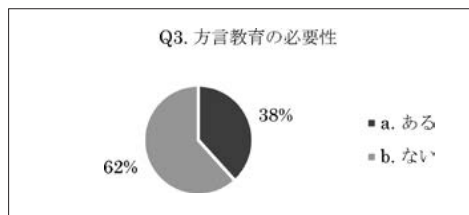


図8. 外国人への方言教育の必要性

次に、方言教育が必要か、出身地域による差がある可能性を考え、「Q3. 方言教育の必要性」と「Q1. 出身地域」とのクロス集計をした。その結果、どこの出身であるかに関わらず、東海地方の方言教育を外国人にする必要はないと考える留学生が多かった。

さらに、「Q3. 方言教育の必要性」と「Q2. 方言接触の経験」とのクロス集計をした。Q2. 方言接触の経験が「a. ある」(計13人)と答えた人の中で、Q3の質問に「a. 方言教育が必要」(7人)と答えた人は、「b. 方言教育が必要ない」(6人)と答えた人より多かった。一方、Q2. 方言接触の経験が「b. ない」(計11人)と答えた人の中で、Q3「a. 方言教育が必要」(3人)と答えた人は、「b. 方言教育が必要ない」(8人)と答えた人より少なかった。同様に、Q2. 方言接触の経験の質問に「c. 方言かどうかがわからない」(計10人)と答えた人の中で、Q3「a. 方言教育が必要」(3人)と答えた人は「b. 方言教育は必要ない」(7人)と答えた人より少なかった。つまり、方言接触の経験がある人ほど、外国人に対する方言教育が必要だと考え、方言接触の経験がない人ほど外国人に対する方言教育は不要だと考えている、という結果になった。これは、2.1.2で述べた「外国人に対して共通語を使う人のほうが、外国人に対する方言教育は必要ではないと感じている」という日本人学生の意見と同様の傾向を示している。

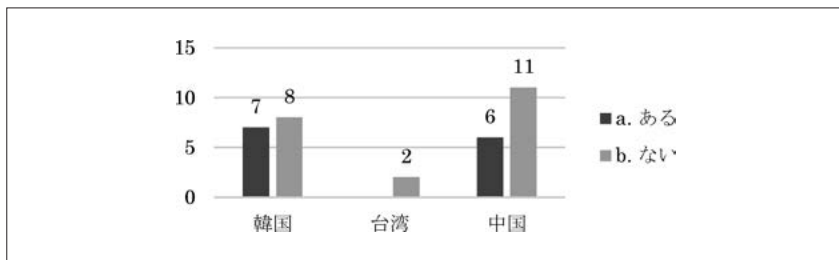


図9. Q3. 方言教育の必要性×Q1. 出身地域

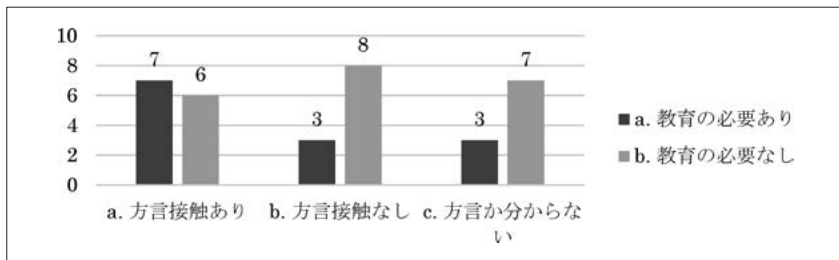


図10. Q3. 方言教育の必要性×Q2. 方言接触の経験

2.2.3. 結果と考察（自由記述部分）

最後に、2.1.3.と同様、Q4.「方言教育が必要／不要と考える理由」の自由記述の回答をKJ法におけるグループ分けの手法を用いて分類した。

まず、方言教育が必要ない（計21人）と答えた人の中で、最も多い理由は「A1. 共通語だけで十分だから不要」（17人、81%）であった。これは2.1.3.の日本人学生の結果と一致する。具体的には、「方言は言語、文化として必要なものではあるが、外国人にとって必要とは思わない」「標準語の勉強だけでも大変なのに、その上方言も勉強するのは負担が大きい」「方言で話しかけられても理解できるから勉強の必要はない」の3つが大きな理由としてあげられる。他には「今は共通語が普通だから方言の学習は不要」、「若者は方言を使わない」という意見もあった。さらに、「A2. 方言に接する機会がないから」（2人、10%）、「A3. 自然習得で十分、教育までは不要」（1人、5%）という理由もあがった。

以上のことから、東海地方の方言でも意思疎通ができるため、時間を割いて方言を学ぶ必要はない。それより、共通語の能力を高めることを優先させたいため、方言教育が不要だと考えていることがわかる。これは2.1.3.で出た日本人学生の理由とほぼ一致する。

次に、方言教育が必要である（計13人）と答えた人の中で最も多い理由は、「A4. 東海地方で生活するのに必要」（6人、46%）であった。これも2.1.3.の日本人学生の結果と一致する。具体的には、「日常生活で方言に触れる機会が多いから必要だ」という意見が最も多く、他に「少しでも知っていたら日本人と円滑にコミュニケーションが取れるようになると思う」という意見があった。さらに、「A5. 方言文化を知り、継承するために必要」（5人、38%）、「A6. 方言に接する機会がないから」（1人、8%）という理由もあった。

以上のことから、日常的に方言に接するため、方言がわかったほうが便利だから、方言教育が必要だと考えていることがわかる。これも、2.1.3.の日本人学生の結果と一致する。

表2 アンケート結果（留学生）

Q3. 必要性	Q4. 回答（Q3. 「ある／ない」の理由）	回答数	割合
ない	A1. 共通語だけで十分だから不要	17人	81%
	A2. 方言に接する機会がないから	2人	10%
	A3. 自然習得で十分、教育は不要	1人	5%
計20人 ³⁾			計90%
ある	A4. 東海地方で生活するのに必要	6人	46%
	A5. 方言文化の継承のため	5人	38%
	A6. 方言に接する機会がないから	1人	8%
計12人 ⁴⁾			計92%

3) Q3で外国人への方言教育の必要がないと答えた人は21人いたが、うち1名は無回答のため合計数が20人、95%になっている。

4) Q3で外国人への方言教育の必要がないと答えた人は13人いたが、うち1名は無回答のため合計数が12人、92%になっている。

以上、東海地方に住む留学生への調査の結果、外国人に対する方言教育は不要だと考えている人が多いことがわかった。東海地方の方言は、共通語と大きな相違がないと感じていることと、まずは共通語をしっかり学びたいと考えていることが理由としてあげられる。この結果は、2.1.3. で述べた日本人学生の理由とほぼ一致している。今回の調査からは、合津（2013）が言うような「留学生は日本人学生を通じて方言とよく接触している」状況は、多くは見られなかったが、一定数の留学生が方言を学びたがっている傾向は見られた。

3. 調査2（インタビュー調査）

2章ではアンケート調査の結果を述べてきたが、3章では方言教育が必要／不要であると考えられる理由を詳しく知るため、インタビュー調査を行った。

3.1. 調査概要

2021年6月、東海地方在住の日本人学生A氏（愛知県豊田市出身）、B氏（愛知県名古屋市出身）、C氏（愛知県一宮市出身）、D氏（岐阜県岐阜市出身）、E氏（三重県桑名市出身）の5名と、外国人留学生F氏（台湾高雄市出身）、G氏（中国江蘇省揚州市出身）の2名、計7名に半構造化インタビューをした。全員大学の学部4年生、女性、20代前半である。F氏とG氏は日本に滞在して5～6年で、2人ともN1を持つ日本語能力超級の学生である。全員大学の学部4年生、女性、20代前半である。

インタビューは筆者と各調査者の2名でzoomにより行った。事前に用意した質問は以下の通りである。

- Q1. プロフィール
- Q2. 日常での方言使用
 - ・誰と話すときに使うか、どんな話題の時か、親疎による使い分けがあるか
- Q3. 接触場面での方言使用
 - ・外国人と話すときに使うか、話題・場面・親疎による使い分けがあるか
- Q4. 留学生への方言教育
 - ・必要だと思うか、なぜ必要／不要だと思うか

インタビュー時間は1人につき約20～30分である。インタビューは全て録画し、終了後に文字起こしをした（計174分）。本研究では、外国人に対して東海地方の方言を使用すること、および、外国人に対して方言教育を行うことについて、日本人学生、および留学生はどう考えているかを探ることを目的としているため、Q3. 接触場面での方言使用とQ4. 留学生への方言教育の回答を中心に、KH Coder⁵⁾（樋口2014）を用いたテキストマイニング

をした。手順は、まず音声資料をテキストデータに書き換え、その後、誤字脱字の修正、表記の統一（学習者、生徒→「学生」等）を行った。共起関係（edge）の種類は、「語—外部変数・見出し」に設定⁶⁾し、日本人学生と留学生の間の共起ネットワークを調べた。

3.2. テキストマイニングによる分析

インタビューで使われた総抽出語数／異なり語数は、Q3. 接触場面での方言使用が8131語／662語、Q4. 留学生への方言教育が7484語／625語である。出現回数上位20位のリストを見ると「方言」「日本語」「使う」「外国」「名古屋」「人」「子」「関西」がどちらの項目にも共通していることがわかる（表3、4太字）。東海地方での方言調査であるが、「関西」が頻出なのは、方言のことを述べる際、関西弁と比較して答えているためと考えられる。

表3 Q3. 接触場面での方言使用の上位語

順位	抽出語	出現数	順位	抽出語	出現数
1	方言	73	11	店長	20
2	話す	38	12	バイト	18
3	日本語	35	13	違う	18
4	使う	32	14	子	18
5	外国	31	15	話	18
6	名古屋	31	16	関西	15
7	人	27	17	友達	14
8	ことば	26	18	敬語	13
9	出る	23	19	日本人	13
10	先生	22	20	英語	12

表4 Q4. 留学生への方言教育の上位語

順位	抽出語	出現数	順位	抽出語	出現数
1	方言	81	11	住む	18
2	人	55	12	標準	18
3	使う	45	13	外国	17
4	教える	31	14	子	17
5	勉強	31	15	知る	17
6	日本語	24	16	聞く	17
7	授業	23	17	ことば	13
8	学校	21	18	自分	13
9	自然	20	19	話す	13
10	名古屋	19	20	関西	12

5) KH Coderとは、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである。アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事等、さまざまな社会調査データを分析するために制作されたもので、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応している。

6) 設定は、抽出語・共起ネットワークオプションの語の最小出現数を「8」、描写する共起関係（edge）の選択を「Jaccard」、「上位70」、「係数を標準化する」で分析をした。

次に、外部変数・見出しを「母語」（「日本語」＝日本人学生／「非日本語」＝留学生）として分析した共起ネットワークの結果を述べる。

まず、Q3. 接触場面での方言使用についてみていく（図11）。母語が「日本語」のみに現れた「意識」「日本語」について生データを分析すると、日本人学生は留学生と話すとき「(A32) 方言は使わない、意識して使わないようにしている」、「(B122) 外国人の留学生の人に会ったときとかは、方言が出たなと思ったら意識的に言い直します」、「(D230) 無意識に使っているのかもしれないですけど、意識的には（方言を）使わないようにしている」というように、留学生に対して方言を使わないように意識していると述べている。では、日本人学生が共通語を意識的に話すようにしているのはなぜか。「(A35) 日本語を勉強してるというのを知ってるから、わかりやすいことばで言おうと思っている」というように、相手の日本語レベルに合わせて共通語を話しているという回答と、「(D235) 日本語のどのことばを使っていいかわからなくなると困ってしまってかわいそうだから、基本的には共通語」「(B125) (留学生が)標準語をしゃべることが多いと感じたときは、方言は出さないようにしている。方言が出たら、標準語に変えたほうがいいかなと思っている」というように、相手の話すことばに合わせて、留学生が学んでいる日本語＝共通語を使うようになるという回答があった。これらの回答から、日本人学生が留学生の使用言語や日本語レベルに合わせてという「親切心」から、方言を使わないようにしている傾向があると言える。

一方で、「(C155) (外国人だからといって) 方言を話さないようにしようとかは意識していない」、「(E253) 外国人だからとはならない。打ち解けたと思ったら普通に方言を使っている」という学生もいる。今回、頭に浮かべた留学生の日本語レベルが非常に高いことも関係しているだろうが、外国人と話しているということを意識しなくなると、親密な関係の人と話することばである方言を使うようになるのだろうと推測できる。

次に、母語が「非日本語」のみに現れた語の中に、「店長」「先生」など目上の人を示す語があることに注目し、生データを分析した。その結果、「(G434) バイトの店長は方言を使う」、「(F346) 保証人さんが（三重の）方言で話してくる」、「(F364) 先生が（関西の）方言で話す」という文脈で使われていた。このことから、特に関西圏の目上の人とコミュニケーションをとるとき、留学生は方言に接していることがわかる。留学生から目上の人に使うというよりも、目上の人から留学生に対して使っている様子が窺える。それは、目上の人から留学生を親しい間柄であると認識しているため、方言を使っているのではないかと推測できる。

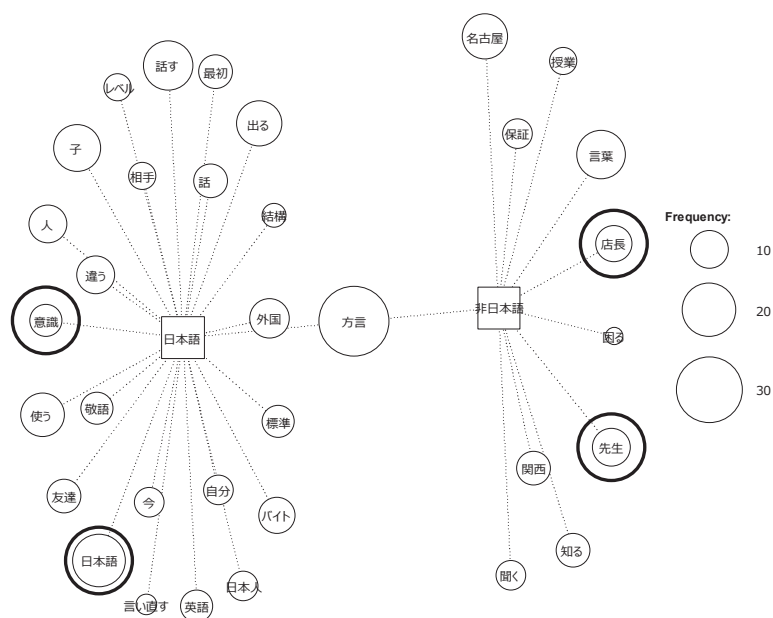


図11. Q3. 接触場面での方言使用

次に、Q4. 留学生への方言教育の結果を述べる（図12）。母語が「日本語」のみに現れた語には「教える」「学ぶ」など学習に関する語がある。生データを分析すると、「(C177) わざわざ教える必要はない」「(A66) 外国人の子が地方でその方言を学ぶ必要はない」という内容で使われていることがわかる。それは、「(C173) 東海地方の方言は、関西弁と違って語尾が変わる程度」なので、「(D240) 共通語がわかれば困らない」からである。ただし、「(C171) 住む場所によっては方言を知っておいた方が良い」という意見もある。具体的な教育方法については、どの日本人学生も「自然に習うだけで良い」「自然習得で十分だ」と考えており、教育機関等で指導する必要はないと考えている。

一方、母語が「非日本語」に多く現れた「名古屋」について生データを分析したところ、留学生は「(F396) (愛知県の方を勉強した後で、) 使える場面がわかったら、名古屋弁は便利だから使ってみよう」が「(F370) 正直、何が名古屋弁かまだわからない」から「(F372) (名古屋弁が) 原因で困ることはなかった」と答えている。これは、アンケート調査の結果(2.2.2)にもあったように、そもそも自分が理解できないのが日本語力のせいなのか、方言のせいなのかの判断がつかないということをあらわしている。他には「(G464) 方言が話せるとかっこいい。日本語力が一段上に見える」という意見もあった。

ただし、日本人学生の回答にある「自然習得で十分だ」という意見は出なかったことを記しておく。留学生へのアンケート結果(表2)でも、「自然習得で十分、教育は不要」と回答した留学生は1名しかいなかった。方言は、留学生にとって自然習得できるものではないのだろう。



図12. Q4. 留学生への方言教育

4. 考察

以上の結果を踏まえて考察する。今回の調査では、30年前に森（1995）が言っていたような「外国人が方言を使用することへの拒絶感」は見られなかった。30年前に比べ、日本の社会に外国人がいる環境に日本人が慣れてきたこと、また、日本全国共通語化が進んでいることがその一因だと思われる。一方で、日常生活で方言に接しており、もっと方言を学びたいと思っている留学生も4割程度いることは気に留めておくべきだろう。それと同時に、日本語母方言話者は、「方言に興味がある留学生にとって、現在の地方の環境は、方言を自然習得できる環境ではない」ということは認識しておきたい。方言は、本来「親しい相手と私的な場面で使われることば」である。方言で話すという行為は、その土地の人と親しい間柄になった証しとも考えられる。つまり、親密な関係性を築くことができれば自然習得の機会は増えるだろう。だが、そうでない場合、自然習得は難しい。留学生がその土地に溶け込めば方言で話しかけてもらえるようになるのか、それとも、方言で話しかけてもらえるから、自然に方言を習得していき、その土地の一員としてみなされるようになるのか。いずれにしても、方言が自然習得できるような「親しい間柄の人と私的な話ができる環境」を作るためには、日本人、留学生双方の努力が必要である。留学生がその土地になじもうと努力するのはもちろんだが、日本人も彼らを「親しい間柄になりうる人間」と認め、心的にも社会的にも受け入れる体制を整える必要があるだろう。

また、今回の調査では、「外国人が方言を理解できなかつたら不安にさせてしまう」ため、「意識して共通語を話す」という声や、「留学生に合わせて共通語を話す」という声が多くあったことは是非とも記しておきたい。これは、外国人を拒絶しているから共通語を話すのではなく、むしろ外国人がわかるようにという親切心から出た声である。相手がわかることばを媒介語に用いるのはコミュニケーションの基本だ。日本語が母語でない「外国人」がわかることばを使うのは全うで親切な対応である。だが、一言で「外国人」と言っても、様々な背景、立場の人がいる。旅行者や一時滞在者ではなく、その土地に長くいたいと考え、その土地になじみたいと考えている外国人に対しては、無理にソトのことば(共通語)を使う必要はないのではないかと述べたい。

日本全国共通語化の流れとは相反するが、方言が口をつく心的距離になったときこそ、外国人との「真の共生」への第一歩が始まるのではないだろうか。東海地方のみならず、どの地方都市でも外国人の数は今後増えていくだろう。同時に、日本全国共通語化もますます進んでいくだろう。「消えゆく方言」など使わずとも、汎用性が高い共通語さえ使っていれば、恐らく生活に支障をきたすほど困るようなことはないし、むしろ、どの地方出身者ともスムーズに会話が進むため、便利で効率的ある。だが、その方言でしか表現できないモノ、コトを切り捨て、便利さや効率のみを追求することは、人間の文化として「正しい」ことなのだろうか。「方言コンプレックス」の時代から「方言プレステージ」の時代へと変化した今、各地域で「方言」、「外国人」とどう付き合っていくべきか、再考すべき時機がやってきたのだと述べたい。

5. まとめ

本稿では、まず、日本人学生を対象に外国人の方言使用と方言教育について意識調査をした結果、方言教育が不要だと考えている人が6割程度いることがわかった。それは、「東海地方の方言は共通語と大きな差がないし、自然に身につくものであるから、わざわざ留学生に負担を強いてまで方言を学ぶ必要はない」からである。一方、方言教育が必要だと考えている人は4割程度で、「方言は共通語とは異なるため、生活に必要で、その土地の文化を伝えるのに有効な手段だ」から必要だと考えている。

次に、留学生を対象に同様の調査をした結果、日本人学生と同様、方言教育が不要だと考えている留学生が、日本人同様、6割程度いることがわかった。ただし、その理由は「方言まで学ぶ余裕はないし、共通語だけで十分だから」で、日本人が言う「方言は自然習得できるから」という理由をあげた人はいなかった。むしろ、日常生活で方言に接する機会がないため、「今は共通語で話すのが普通で、周りの若者も方言を使っていない」と認識していることが窺える。一方、方言教育が必要だと考えている留学生は4割程度いることが

わかった。それは、日本人同様、「方言は共通語とは異なるため、生活に必要なし、文化を伝える際にも有効な手段だ」からである。さらに、「方言に接する機会がないからこそ学んでみたい」という意見もあった。このことから、方言を身近に感じている留学生と、方言との接点がないと感じている留学生がいるが、両者とも方言教育の必要性を感じているということがわかった。各地域の現状に合わせた方言と外国人との付き合い方を考えるのが良いだろう。

最後に今後の課題を述べる。今回は意識調査のみで終わってしまったが、日本人学生、留学生双方の方言使用、方言接触の実態を調査する必要がある。また、言語学的側面から見ると、留学生が学んできた共通語と方言との間にどの程度の乖離があるかは、外国人への方言教育の必要性に影響を与えるだろう。さらに、地域の人々が「ソトの人間」に対してどの程度方言を使うかという要因も、外国人の方言に対する意識に影響を与えると考えられる。これらのことを考えながら、研究を進めたい。

*本研究は「日本語教師の母方言を生かした『機能表現指導の指標』（令和2年度科学研究補助金基盤研究（C）課題番号20K00737 研究代表者：高村めぐみ）による助成を受けています。

参考文献

- 合津美穂（2003）. 「留学生における非標準語との接触・使用・学習意識」『信州大学留学生センター紀要』4, 39-55.
- 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ（2013）. 『方言学入門』
- 国立国語研究所（1993）. 「方言と日本語教育」『日本語教育指導参考書』20, 1-171.
- 近藤紗耶（2010）. 「若年層の方言使用と方言意識—愛知県豊明市の中学生を対象として—」『東京女子大学言語文化研究』19, 33-49.
- 田中春美（1988）. 『現代言語学辞典』成美堂
- 田中ゆかり（2011）. 『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店
- 樋口耕一（2014）. 『社会調査のための軽量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 森由紀（1995）. 「外国人の方言学習をめぐる考察」『三重大学日本語学文学』6, 122-109.